

「小男」「ひき人」と「一寸法師」

——古奈良絵本・御伽草子の語彙——

小池清治

一

室町時代末期より江戸初期にかけて制作された、いわゆる古奈良絵本の中に、「小男もの」と称される一群の物語群がある。これらは、佐竹昭広氏により、御伽草子の「一寸法師」「物くさ太郎」に先行するものと位置づけられ、^{注1}あるいは、岡見正雄氏により、これらに後行するものとみなされている。^{注2}すなわち、文学史的観点において、相反する位置が与えられているわけである。

本稿の目的は、これらの物語群に使用されている語彙の考察を中心として、「小男もの」の位置づけを試みることにある。

注1 佐竹昭広「成りあがり——一寸法師と物くさ太郎——」(『下剋上の文学』(一九六七年九月・筑摩書房)所収)

注2 岡見正雄『天理図書館 善本叢書・古奈良絵本集一』解題(一九七二年九月・八木書房)

二

現在、『国書総目録』、横山重・太田武夫両氏編『室町時代物語集』及び『天理図書館 善本叢書、古奈良絵本集 一』などによって知られる「小男もの」の諸本は次の十一種である。今、私見により通し番号を付して列挙しよう。「」内は本稿での略称である。

- ①こをとこのさうし(高安六郎博士蔵・奈良絵本)〔高安本〕
- ②同別本〔高安別本〕
- ③同(岡村槐軒氏蔵奈良絵本)〔岡村本〕
- ④小男の草子絵巻別本(天理大学図書館蔵絵巻一軸)〔天理絵巻別本〕
- ⑤ひきう殿物語(早稲田大学図書館蔵奈良絵本)〔ひきう殿物語〕
- ⑥小男の草子絵巻(天理大学図書館蔵絵巻一軸)〔天理絵巻〕

⑦ 小おとこ（守屋孝蔵氏蔵奈良絵本）〔守屋本〕
 ⑧ 同（岩瀬文庫蔵奈良絵本）〔岩瀬文庫本〕
 ⑨ 同（天理大学図書館蔵奈良絵本）〔天理本〕
 ⑩ 逸名草子（高野辰之博士蔵絵巻一軸）〔高野本〕
 ⑪ 小おとこ（清水泰氏蔵絵巻一軸）〔清水本〕
 さて、佐竹氏は前掲論文において、主人公の人間像形成過程、「成りあがり」という観点を重視されつつ、諸本関係及び、御伽草子「一寸法師」との関連を次のように述べておられる。

高安本は、また天理本『小おとこのそうし』（本稿 ⑥「天理絵巻」に同じ）、守屋本・清水本・天理本『小おとこ』（本稿の⑨「天理本」に同じ）と密接な連絡を持つ。小男ものの発展段階を正確にたどることはむづかしいが、内容から見て、『ひきう殿物語』・天理本『小男の草子』（本稿の④「天理絵巻別本」に同じ）の系統がいちばん遅れることはほぼ確実である。御伽ばなしでなつかしい一寸法師には古写本がたわらず、わずかに渋川板御伽草子の本文をもって最古とする。時間的にも内容的にも、御伽草子の『一寸法師』の本文が『ひきう殿物語』の系列を継承した、かなりあとの成立であることは争えない。

（前掲著47ページ48ページ）内注記、傍点は小池

佐竹氏は、本稿でいう①⑥⑦⑨⑪の諸本を一系列とし、④⑤を別の系列とする。そうして、後者の系列が「いちばん遅れる」ものと

し、これを継承してかなりあとに御伽草子の『一寸法師』の本文が成立したものとされているのである。

①⑥⑦⑨⑪の諸本においては、主人公は最初から終りまで、「小男」のままであり、かつ、五条天神の本地であったとする点において共通し、本地譚という中世的仏教臭を具有する古さを示すのに対して、④⑤は、打ちの出の小槌をさずかって大男となる点において前者と大きく異り、さらに、主人公と五条天神との関係は一言も触れていない点に新しさを認め、御伽草子の『一寸法師』につながるものである。

また、黒沢幸三氏は、「小子部氏の伝承と一寸法師譚^{注3}」という民俗学的論文において、

この「小男もの」もさらに二つの系統に分け得る。それは五条の天神との結びつきの強い六つ（Aグループとする）と、結末にいたって急に背が高くなる二つ（Bグループとする）。早大図書館本「ひきう殿物語」と天理本「小男の草子」別本）とである。（40ページ上）

と、佐竹氏の説を踏襲し、さらに、『一寸法師』との関連についても、

私も佐竹氏と同じで、雷神信仰という宗教的呪縛から一步一步はなれて行くところに、「一寸法師」・「物くさ太郎」形成の意義が

あると思う。(46。下・注記)
と述べて、民俗学的見地から佐竹氏の説をサポートしておられるのである。

「小男もの」の諸本に関する個別的解説は前掲『室町時代物語集』の解題その他に見られるが、系統的考察は、管見にはいった限りでは、右の二氏のものにつぎる。御伽草子『一寸法師』との関連は後述することにし、次に、「小男もの」と称される物語群に収載される和歌を検討することにより、十一種の諸本関係を明らかにしてみたいと思う。

注3 黒沢幸三「小子部氏の伝承と一寸法師譚」(『文学』一九七三年九月・岩波書店)

三

収載和歌の異同ということを目指としてこれらの物語を分類すると三類に分類される。

①「高安本」所収の和歌は次の三首である。

(1) 三日月のほのかに見へていりぬるはそらやみとこそいうべかりけり

(2) かずならぬうきみのほどのつらきかなことほりなれば物もいわれず

(3) これや此ゆくもかへるもわかれてはしるもしらぬもあふさかのせき^{注4}

(1)「三日月」の歌は、次のような場面で「こをとこ」が詠む。

清水寺で見染めた「いつくしき」上臈に「こをとこ」はやつとの思いで逢うことができる。しかるに、上臈は、実際に「こをとこ」を見て、その小男ぶり、異形さに驚き、「そらむねやみて、しとみ、しやうじたてまわして、うちへ入たまふ」のである。せっかくの逢瀬、恋の成就があわや破局になるという場面においてである。「とりあへず」詠んだ歌を聞いて、かの上臈は、「うたのおもしろさよとて、しやうじあけて、うちに入たまふ」のである。この歌は、「こをとこ」のピンチを救ったといえる。

こうして獲得したチャンスではあるが、「こをとこ」はみずからの失態で無にしてしまいそうになる。すなわち、招き入れられたのはいいが、「こをとこ」は、そこに立て並べられた琵琶をこわしてしまふ。上臈は、「これはふしきの物かなとて、又かいつかみて、多んのうへに、なげにける」ことになる。なげられながら詠んだ歌が、(2)「かずならぬ」の歌である。この歌は、またまた「こをとこ」のピンチを救い、かつ上臈の心を完全にとらえるのである。「あらやさしや」これが最終的に下された「こをとこへ」の評価である。この歌が決定打になり、「こをとこ」は想いをとげ、やがて栄華の道をたどることになる。

このように見てくると、単に物語に添えられた歌というよりも、それらの二首の和歌は、歌物語における歌と同様に、この物語の要といえることができるのである。

第三首目の「これや此」の歌は、前二首に比較し、重要度は落ち

る。というより、なにやらとって付けた感がないでもない。というのは、「きんせん、くんじゅ、したまふなり、めでたしめでたし」のあとに付加されているからである。有名な蟬丸の歌を作者がサービスとして追加したものであろうか。物語は「めでたしめでたし」で終わっているのである。②「高安別本」では、この歌を欠き、以下の諸本にも絶えて現れないところを見るとなにか誤脱があるのかも知れない。とにかく、「小男もの」の系列を考える上において無視してもよいと考える。

以上の考察により「三日月の」「かずならぬ」の二首が①「高安本」において重要な役割を担っていることが明瞭になったわけであるが、さらに、この二首は諸本の系列関係を考察する上においても重要な役割を有している。先に述べた三類とは、すなわち次のごとくである。

第一類 「三日月の」「かずならぬ」を両方収載するもの〔①②③の三本〕

第二類 「三日月の」だけを収載するもの〔④⑤の二本〕

第三類 「かずならぬ」だけを収載するもの〔⑥⑦⑧⑨⑩⑪の六本〕^{注5}

この三分類は、ほかの要素の差異ともほぼ完全に一致する。たとえば、主人公の出身地という点をとると、第一類は「大和の国」、第二類は不明（最初から京都の九条に住居していることになっていない）第三類に属する諸本では、すべて「山城の国」ということにな

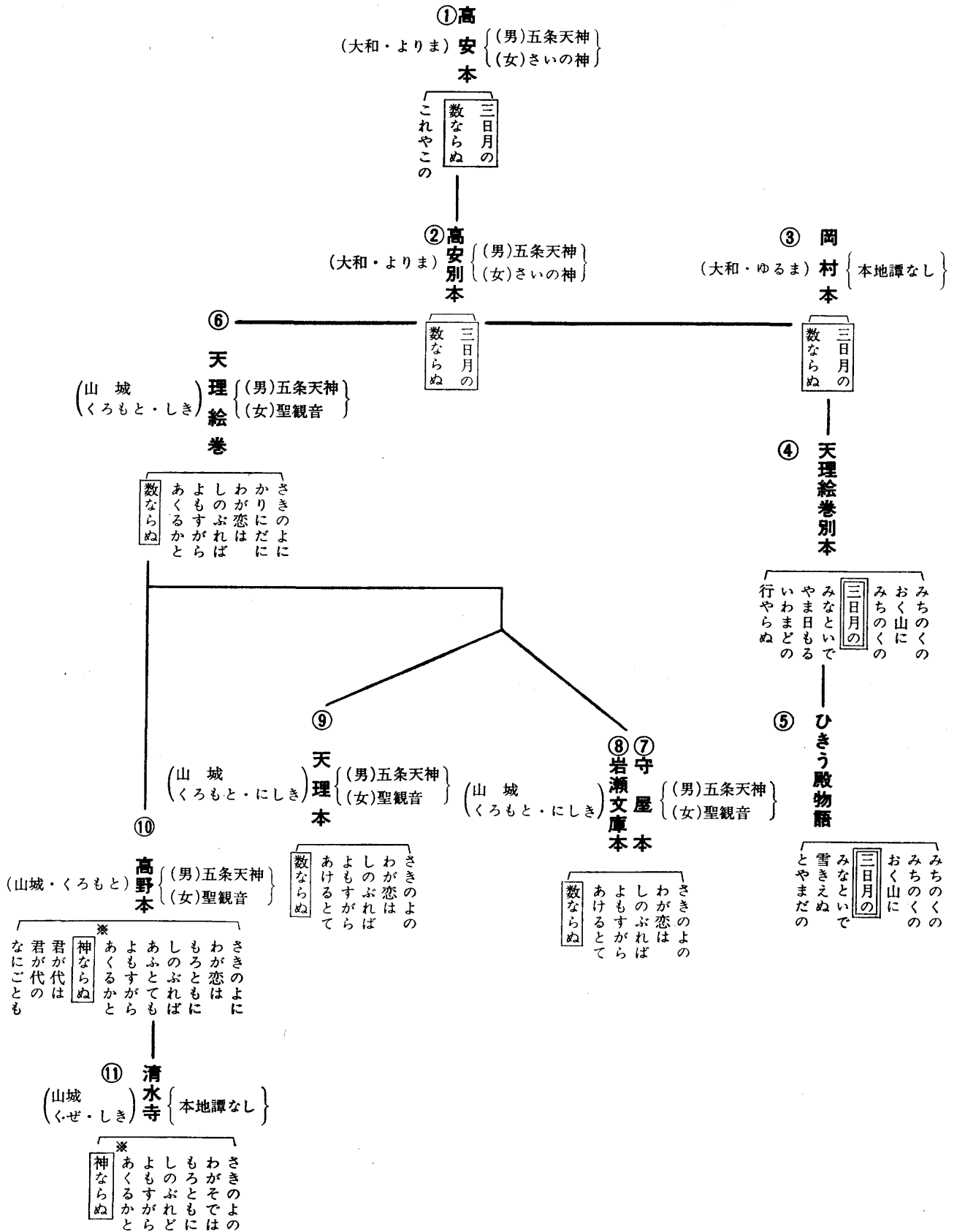
る。また、主人公がなにの本地であったかという点をとると、第一類は、「五条天神」(男)「さいの神」(女)第二類は本地譚ではない。第三類は「五条天神」(男)「聖観音」(女)という具合である。次に、諸本所収の和歌の初句を示し、おおよその系統図を作制してみると左図(67ページ参照)のごとくになる。

第一類において特異な位置を占めるのは岡村本であり、これには、本地譚がない。本地譚は、主人公の人間像の秘密の根元的なものを示すものであり、^{注6}また、「小男もの」と中世の神仏信仰とのかかわりを示す重要な要素である。第三類の最後に位置づけた「清水本」も、本地譚を欠くのであるが、これは、「数ならぬ」の変化した「神ならぬ」の歌を有し、かつ、主人公の出身地を山城の国と明記するという点で古さを示す。このように考えて来ると、本地譚から完全に解放され、新しい人間像を示す第二類の「天理絵巻別本」「ひきう殿物語」は第一類の「岡村本」から派生したものと考えるのが自然であろう。

第二類の指標となるのは「三日月の」の和歌である。これは、前述のごとく、この物語の中において、重要な役割を果すばかりではなく、「小男もの」の制作された時期が室町末期であることをも示唆する点で軽視できないものであることは、夙に高野辰之博士の御指摘がある。^{注7}

第二類のもうひとつの特徴は、主人公の名を「ひき人」(④「天理絵巻別本」)「ひきう殿」(⑤「ひきう殿物語」)とする点である。

第一類、第三類は、すべて「こをとこ」「こおとこ」とし、個有名



詞としては、「とし久」「ごんのかみ」(①「天理絵巻」⑩「高野本」⑪「清水本」)「さこんのかみ」(⑨「天理本」)が主人公の口から名乗られるばかりである。すなわち、背丈の低い主人公を、「ひき人」「ひきう殿」とする第二類は、「小男」ととらえる第一・三類と対立する。これらの語彙の新旧は、第二類と第三類との新旧を考察する上で重要なポイントとなるであろう。これについては次節以下において論述する。

第三類の諸本は、第一類の諸本が収載する「三日月の」「数ならぬ」の二首の和歌のうち、「数ならぬ」のみを収載している点で、第一類より新しいものであることは明瞭である。また、清水本を除いてはすべて本地譚を伝えている点から、「高安本」または「高安別本」の系列から派生したものであることも容易に推定されるのである。この点、第一類の「岡村本」の系列から派生した第二類とははっきり類を異にするといえよう。

さて、第三類の指標となる和歌は、「数ならぬ」の和歌である。前掲系統図で示したように、⑥⑦⑧⑨の諸本においては、収載和歌の最後に、この和歌は位置しており、主人公の恋の成就を達成せしめる最大の決め手となっている。

数ならぬわが身のほどのつらきかな

ことほりなれば物もいはれず(「天理絵巻」)

この和歌の巧みは、下句にある。「琴割り」と「理り」の掛詞が、物語の場面に合致し、「めでたしめでたし」の結末に導くキーポイントとなっていることは前述した通りである。

ところで、この趣向は御伽草子の『物くさ太郎』でも同様である。

さらば余の所にもなくして、上臈の宝ともおぼしめず、てひきまるといふ、琴の上に倒れかかりて、琴をば微塵にそこなひぬ。女房是を見て、あさまし、いかにせんと、涙ぐみて、顔に紅葉をひき散してかくなん、

けふよりはわが慰みに何かせん

物くさ太郎いまだ起きもあがらず、あさましと思ひて、女房の方をうち見て、

ことほりなれば物もいはれず

と申しければ、あなやさしの男の心やおぼしめして(『御伽草子』
〔日本古典文学大系〕203頁)

和歌と連歌という違いはあるが同巧異曲であることはあきらかである。^{注8}佐竹氏の御説のごとく、「小男もの」が御伽草子に先行するものとすれば、この第三類の系列に属するものが『物くさ太郎』の、第二類が『一寸法師』の先行文学となると言うことができよう。

注4

横山重・太田武夫編『室町時代物語集』翻字による。ただし、濁点は、小池が付す。以下の引用はこれに従う。

注5

⑩⑪においては、「神ならぬわが身のほどとてつらきかなことほりなれば物もいはれず」(⑩「高野本」)「神ならぬわが身のほどのつ

らかきなことはりなればものもいはれず」(⑩「清水本」)のよう
に、初句が「神ならぬ」の型をとるが、これは「数ならぬ」の小変
異とみなし、第三類に所属するものとした。

注6

「天神であり、小男神であった五条天神こそ、文学の才能と小さな
からだを二つながらかねそなえた神であった。一寸法師が小男の身
でありながら、異常な才能だけで、さして苦勞もせず恋を成就
し、成りあがることのできた幸運の秘密は、かれが五条天神の本地
だったところにある。(佐竹・前掲著45ページ46ページ)

注7

高野辰之「矮人物語」(文学・第七卷第七号)に「明人候継高の著
した全浙兵制の附録日本風土記卷三字書中に以呂法四十八字で和歌
を記すさまを説いて、托月譬病と題して、みかつきのほのかにい
ていりけるをそらやみとこそゆうべかりけり を例に引き、切意に
仮病可比初三月 渺見出光鶯地入只此是也とあるのをふと見出し
た。全倭兵制の出来た時代は明かでないが、五巻あって、第一巻に
倭船・倭好寇・倭刀等の事があり附録に近報倭警があり、候継高は
万曆十七年倭寇を防いで功勞のあった人である。同年は我が天正十
七年に当る。又以て此の歌を含む小男の草子の作成を知る一助とな
るのであらう」と「追記」しておられる。

注8

市古貞次『中世小説の研究』(301ページ)にその指摘がある。

四

「小男もの」の諸本に収載されている和歌の異同という観点に立
って諸本関係をたどってみると、前節に示したような発展継続の相
を把握することができるのであるが、この節以下においては、これ
ら「小男もの」と御伽草子の『一寸法師』『物くさ太郎』との関係
を改めて考察してみたいと思う。

佐竹氏の説は第二節及び第三節において紹介したので、ここでは

岡見正雄氏の説を紹介することから始めたい。岡見氏は、前掲解題
において⑥「天理絵巻」の更概を述べられたあと、次のように述べ
ておられる。^{注9}

全体の構想は明らかに『一寸法師』と『物臭太郎』から取って居
る所がある。即ち草蔭に見えない程の小男であるというのは足駄
の下から物を言う一寸法師から、又女房のきんの琴を割り「こと
はりなれば物もいはれず」といと詞句を含んだ歌を詠ずるのは物
臭太郎から取ったのであり、物臭太郎は室町期として比較的古い
成立と私は考えているが、これ等が草子文芸として都に賞玩され
た後、小男の草子絵巻が翻案され作られたものと思う(前掲著解
題21ページ)

解題という文章の性質もあってか、論の根拠はかならずしも明解
ではない。人間像の成立過程というものを論拠とした佐竹説の方が
この場合、より説得的であるのは、いたしかたないところであらう
か。

ところで、佐竹説が全面的に承認されるかというところからしても
そういえないところがある。まず『一寸法師』に関していえば、次
のような論点である。

「五条天神の本地譚からの離脱を、ほとんど唯一の目標に発展し
つづけた一寸法師の物語りは、御伽草子に盛られたような内容にま
だ変貌を重ねた末、ようやくゆたかな卑賤者出世の物語りとしてで

「きあがった」^{注10}と述べられるが、『一寸法師』には、「住吉の御誓に、末繁昌に榮へ給ふ」^{注11}の文章が話末に存在する。五条天神の本地譚ではたしかにないが、住吉信仰という中古から中世へと続いた信仰が称えられ、必ずしも、神仏信仰から解放された人間像を示しているとはいえないのである。換言すれば、御伽草子においても、中世的古さが払拭されてはいないのである。

また、『物くさ太郎』についていえば、やはり、その話末に「殿はおたがの大明神、女房はあさいの権現とあらはれ給ふ」^{注12}とあり、本地譚そのものなのである。

論の一端をとらえて、あげ足取りのごとき言説を弄したが、ここで指摘しなかったことは、佐竹説の全面的否定ではなく、構想の類似、詞句の同一性という点から考察すれば、岡見説も成立しうるし、また、人間像の形成の過程という観点からだけでは、必ずしも決定的なことはいえないのではないかということである。

注9 注2参照

注10 注1の著書49ページ

注11 『御伽草子』(日本古典文学大系)326ページ

注12 同右。206ページ

五

本稿では物語成立の新旧を考察するひとつの観点として、そこに使用された語彙の新旧というものを導入する。ただし、これらの物語は、いうまでもな擬古文であるから、その使用語彙の新旧を額面通りに受け取ることはできない。慎重な吟味が必要となろう。

まず、物語の新旧を判定する語彙的指標として主人公の名づけに使用された語彙をとりあげて見る。

「小男もの」第一類及び第三類では「小男」が専用され、一例、

「ちいさご」が使用されている。第二類では「ひき人」「ひきう殿」

が、御伽草子の『一寸法師』では、「一寸法師」が使用されている。

「人なるや、ちいさごといふ人よ」 (「天理本」)

「ちいさご」の例は、右の一例である。これに相当する箇所は他の本では、次のごとくである。

「ちいさきおとこはかやうの物をや」 (「天理絵巻」)

「人なるぞや、ちいさき事や」 (「守屋本」)

「ちいさきおとこは、かやうのことかや」 (「高野本」)

「かかるちいさき人も、世には、有ものにな」 (「清水本」)

「ちいさご」は「天理本」独自の用語であり、「天理本」の成立時期を考察する上で貴重な語である。また、前後の文脈から判断するに、本来は、絵に付された詞書きであったと考えられる。本文の詞章が擬古的であるのに対して、比較的当代語性が強いといわれる詞書きに、この語が使用されている点も、「天理本」の成立期を考える上で重要である。

「ちいさご」または、「ちいさご」の語は、「小子部連」(書紀、

雄略、六年三月)の存在から、上代にもあったことが推定されるが、普通名詞の確例はない。下って中古には、

「即ち雷彼の人の前に墮ちて、小子と成りて随ひ伏す」

「小子の跡深き三寸践み入り」(同右)

「然して後に少子元興寺の童子と作る」(同右)^{注13}

とある。これらの「小子」「少子」は、最後の例にても知られるように、「こども」「少年」の意である。日本書紀の例も、「嬰兒を聚めて、天皇に奉獻する」とあり、同義である。上代、中古では、他に例がない。

「ちいさこ」が、せいひの低い男、小人の意を有するようになるのは中世のようである。

柳田国男氏が発見した「小子塚」に関する伝承は、次のごときものである。

「相伝ふ、木曾殿の疋子其長一尺二寸、故に小子と謂ふ」

(『吉蘇志略』^{注14})

「木曾殿」に関する伝承で、淵源は中世に遡ると考えられるが、『吉蘇志略』は、宝暦七年(一七五七)になったもので確実性の点で憾みが残る。「小人」の意の「ちいさこ」の確例でもっとも古いものは、『運歩色葉集』であろうか。同集に「小子^{チイサゴ}変」^{注15}と記載されている。左下に小書きにされた「変」の字は浅学にして判然となし得ないが、あるいは「変化の者の意」であろうか。『運歩色葉集』は、元龜二年(一五七一)に成立したものが最も古い。したがって「小人」の意の「ちいさこ」は、少くとも、これ以前に存在していたと思われる。江戸初期の節用集、『書字考節用集』は「侏儒^{チイサゴ}短人也 白文集 道州 民多^ニ——長者^キ不^ニ過三尺余^ニ市作^ニ矮奴^ニ」^{注16}と記述し、「ちいさこ」が侏儒を意味することを明記している。

以上の検討により、侏儒の意の「ちいさこ」は、室町末期には存在し、この語を詞書きに伝える「天理本」は、この期または、この期以後に成立したと考えてよいであろう。

ところで「天理本」は「ちいさこ」よりも「小男」を多用する。

「山城の国、くろもとの郷、にしきの村と申すところにたけ一尺、よこ八寸のこ、おとこあり」

「こ、おとこに御返事とてとらすれば」 (以上「天理本」)

また、「天理本」の属する第三類の諸本はもとより、より古い時期に成立したと考えられる第一類にも「小男」が多用されているのである。

「さて、内の女房、これを見て、こ、ほとこがあり様は、何とも知れぬ態なり」

「こをとこ、とりあへず」

「此こ、おとこが、くわふう^{マツ}にまかせて、玉のやうなる、みどりこいでき」

「さるほどに、こ、おとこは、五ちう^{マツ}の、神体なれば、やがて天神にあらわれたまふ」 (以上「高安本」)

「こ、おとこが心の内こそあはれない」
「小男申すやう、さも問はば、山城の国、くろもとの郡、しきの村の地頭に、こんのかみと申す者にて候ふと仰せ候へ」

(以上「天理繪巻」)

などである。さて、「小男」の語誌はどのようなものであろうか。「小男」も、「ちいさこ」と同様、古くは少年の意であった。

「宮々いとうつくしきに、こおと、こどもにておはします」

(栄花・様々のよろこび)^{注17}

「かしらおろし侍りて後、前中納言雅頼まだこをと、こに侍りける時、始めて昇殿申させ侍りけるを評されて侍りければ詠みて奏せさせ侍りける」
(千載・雑・中・一一五三)^{注18}

侏儒の意の「小男」が見えるのは、中世からであるが、「ちいさごや、次に述べる「ひき人」「一寸法師」と異なり、この語は、この期の辞書に記載されていない。これは、「ちいさご」以下の語が、侏儒の意という特殊な意義を有するのに対し、「小男」は、ちいさい男、せいの低い男という「小」+「男」という単純な語構成と、そこから平易に導きだせる意義とを有する語で、特に辞書に記載する必要を感じさせなかったためかと思われる。「ちいさご」以下の語が、一般人と類を異にするものと解されるのに対し、「小男」は、一般人の比較的背丈の低い者を意味するのが普通の用法であったのであろう。

「夜ニ入テ惟方ハ院ノ御書所ニ参リテ、小男ニテ有ケルガ直衣ニタクリアゲテ」
(愚管抄、五・二条天皇)

この例も、背丈の低い男の意を示すものではあるが、侏儒の意でないことはあきらかであろう。

「小男」を「へんげのもの」(「天理絵巻」「守屋本」)「まゑんのもの」(「天理本」「高野本」)「ためしなきもの」(「清水本」)と捉える用法は、小男ものをもって嚆矢とすると思われる。^{注19}従って、「小男」の語を、物語成立の期を測定する指標には、直接的にはできな

いのであるが、「ちいさご」を内在させるという点で、第一類・第三類の諸本は、室町末期の作としてよからう。

第二類では「ひき人」「ひきう殿」が用いられる。第一・三類と異なるのは、「小男」が普通名詞として使用されているのに対し、「むかし九でうあたりに、ひき人と申おとこおはしける」
(「天理絵巻別本」)

「むかし九でう殿御内にひきう殿ときこへしおとこありける」
(「ひきう殿物語」)

のように、固有名詞として使用されている点である。これは、御伽草子の『一寸法師』においても同様である。

「ひき人(ヒキヒト・ヒキフト・ヒキウト・ヒキウド)」は、ちいさご」「小男」と異なり、最初から侏儒の意で用いられた。

「大きに侏儒・倡優を進めて」
(書紀・武烈・八年)

「此の経を受持する者を誇らば、諸根闇鈍に、^{ヒキヒト} 矧^{カクナシ} 陋^{アツナハ} 攀^{アツナハ} となり」
(靈異記・下・二〇)

また、古辞書にも、次のごとく記載され、

「侏儒 ヒキウト 上タケヒキナリ 下 サカシ ハカセ オキナリ ヒキウト」
(類聚名義抄)

「侏儒 ヒキヒト 短人也 ^儻 侏儒詞」
(色葉字類集)

また、室町期の辞書には、

「儻^{シユ} ヒキウト モノシリ ハカセ サトシ ヤハラカ。侏^{シユ} ヒキシ ミジカシ ヒキウト。儻^{ダク} ヒキウト ミジカシ」
(倭玉篇)

「矮 ヒキフト。侏儒 ヒキフト」

(妙本寺蔵 永祿二年 いろは字)^{注20}

とある。このように「ひき人」の用例は、上代から中世末期に至るまでその系譜をたどることができるのである。この意味では、第二類は、かなり古い時期にまで遡らせることが可能ということになる。ところで、注意すべきは、「天理絵巻別本」において、「ひきひと」または、「ひきうと」を表記するのに、常に「ひき人」との型をとっていることである。

「ひき人」の語形は、

↓ヒキウト↓ヒキユート
ヒキヒト↓ヒキフト
↓ヒキウド↓ヒキユード

の過程を経て変化したものと推定される。日葡辞書を見るに、

「Fiquito Anão Tambem sediz Issumbóxi」

「Issum bôxi Anão Melius Fiquito」^{注21}

と記されており、日葡辞書の段階、いいかえると近世初期においては、「ヒキユート」の形であることがわかる。「天理絵巻別本」の「ひき人」は、この語形を表すものと考えられるのではなからうか。「ヒキユート(またはヒキユード)」以外の語形は、すべて直音であるから仮名表記が可能であるが、この語形、すなわち拗長音を含むこの語は、当時の表記意識では、正確には仮名で表記しにくかったと推定されるからである。

このように考えると、「天理絵巻別本」は中世末期から、近世初

期にかけてなったものということになる。また、早稲田大学図書館蔵の「ひきう殿物語」は、本来「ひき人の物語」であり、「ヒキウト(またはヒキウド)ノモノガタリ」と呼ばれたものが、この語構成が後に見失なわれ「ひきう殿物語」と誤って認識されたものであろう。^{注22}とすると、この本は「天理絵巻別本」より、さらに遅れる時期の成立ということになる。

また、『全漸兵制考

日本風土記』の巻四「篤麿」の項には、「独眼人

各釜肩かため」^{注23}「啞子 伊伊石いし」等とらんで「矮子血古許多ひき

ひ人」が記載されている。「ひき人」を語源的に解釈した語形「低い人」であり、室町末期のある時期に使用された語形である。『日本風土記』には、第三節にも述べたごとく、第二類の指標となる

「三日月の」が収載されている。このことは、第二類の諸本の成立の時期を示唆するもうひとつの証拠となるであろう。

さて、最後に御伽草子の「一寸法師」に用いられた「一寸法師」なる語はいつごろから使用されたものであろうか。

管見の限りでは、「ひき人」の項で例示した日葡辞書の例がもっとも古い。

「Issum bôxi Anão Melius Fiquito

(イツスンボキシ、侏儒、ヒキユートがまさる)」

の記述を信んずると、「ヒキユート」が由緒正しい語となり、「一寸法師」は俗語的、あるいは、より新しい語形であったと意識されていたことになろう。

「俗に矮人を一寸法師といふ」(嬉遊笑覧・四・武事)^{注24}

の記述も、「一寸法師」の俗語性を指摘したものである。『嬉遊笑覧』は、この記述の後に、

「法師は小法師と云より小き物を名づく能の狂言に小兒をかなはうしと云るはそのかみの俗称なり(尤草子)」

とし、「犬子集」「正章千句」「洛陽集」などの俳諧集に見える「一寸法師」の例をあげている。また、

「侏儒 一寸はふし 侏儒 俗云一寸法師」

(和漢三才図絵・卷十)^{注25}

の記述も「一寸法師」の俗語性を指摘する。

このように見てくると、「一寸法師」は近世初期に、侏儒を意味する俗語として使用されるようになったもので、「ちひさこ」「小男」「ひき人」などより新しい時期の語ということになる。御伽草子の『一寸法師』は、「小男もの」の諸本に遅れて成立したと推測され、佐竹説の妥当性を確認することになる。

注13 遠藤嘉基・春日和男校注『日本霊異記』(日本古典文学大系70)に

よる。『小子』は、ワラハ(二四二頁注一〇)とも訓めるが、ここは、小字部栖軽の話に縁があるからチヒサコと訓む(71頁注10)とある。

注14 『定本 柳田国男集・第七卷』(筑摩書房・一九六二年十一月)所収「一寸法師」(9頁)による。

注15 中田祝夫・根上剛士編『中世古辞書四種の研究並びに索引』(風間書房・一九七一年七月)による。

注16 中田祝夫・小林祥次郎編『書言字考節用集研究並びに索引』(風間書房・一九七三年三月)による。

注17 松村博司・山中裕校注『栄花物語』(日本古典文学大系75)による。

注18 松下大三郎・渡辺文雄編纂『国歌大観』(角川書店・一九六一年十二月)による。

注19 現行の諸辞書では、狂言記の「飛越新発意」の例、「西のかたより、ちいさい小男が出て」を最も古いものとして例示する。

注20 中田祝夫・北恭昭編『倭玉篇の研究並びに索引』(風間書房・一九六六年六月)鈴木博編『妙本寸蔵』(永録二年いろは字)(清文堂・一九七四年三月)による。

注21 土井忠生解題『日葡辞書』(岩波書店・一九六〇年十二月)による。

注22 佐竹昭広氏は、前掲論文において、「ひき人の物語」の意であろう。本書では主人公を「ひきう殿」と呼んでいるが、同系の天理本『小男の草子』は、すべて「ひき人」と呼ぶ。この方が正しい。ヒキウトの語は、『日葡辞書』イッスンボウシの項に見いだされる。語源は「低人」、背の低い小人の意である(63頁)とされる。

注23 京都大学文学部編『全浙国語学国文学研究室編』(兵制考 日本風土記 本文、解題・国語・漢字索引)(一九六一年九月)による。

注24 『日本随筆大成』本(438頁)

注25 『日本随筆大成』本(148頁)

追記

すでに与えられた紙幅を大きく越えてしまった。他の語彙の検討も予定していたが今回は以上にとどめる。なお『一寸法師』は、「小男」もの、特に、その第二類から発展したものであることは、佐竹説で指摘するところであるが、それだけではなく、『赤松記』などが伝える「三尺人道」の異名をとる赤松義則(一説に赤松満則)に関する伝承なども影響を与えたのではなからうかと考えている。(昭和五十年九月二十五日成稿)